

米国の幼児教育における五つの実験(九)

大戸 美也子

福祉と保育とを統合する実験

はじめに

“Day Nursery”という言葉は、「保育所」と訳されていることは衆知のことである。ところが、一九六〇年代に入ってからこの言葉に代わって“Day Care”という「専門的用語」としても、個人的用語としても、あまりなじみのなかった、ぎくしゃくした、また侮蔑的な印象を与える言葉”(Caldwell, 1971)が頻繁に使われるようになってきた。その扱い方をみると、一般的用語として「保育所」と同じように使っている場合も、明らかに従来の保育概念を脱皮した新しい福祉・保育施設を示す固有名詞として使っている場合もあって、やや混乱している。ここでは、「デイ・ケ

ア」を保育所の今日的表現とみなし、訳を付けずそのまま使うことにする。

米国のデイ・ケアは、一八五四年ニューヨーク市立小児病院の附属機関として設立されたのがそのはじまりで、すでに百二十年以上の歴史をもっている。この間にデイ・ケアの目的も、展開する場所も、主たる対象者も、また保育内容も大きく変化してきた。ことに、一九六〇年代の変化はめざましく、その名称までも一変させた程である。今日の総合的デイ・ケアの仮説、実践、その問題点を展望するためには、百二十年の間にデイ・ケアが一貫しておこなってきたこと、新しく変わったことをそれぞれ明らかにすることであろうと思われる。

一 デイ・ケアの変遷

デイ・ケア変貌の跡を明らかにするために、ここでは四つの項目に焦点をあてて、各時代の特色をみていくことにする。

1 デイ・ケアの目的——デイ・ケアがどのような機関として求められたかという観点からその目的を明らかにする。

① 特別の人々を対象とする福祉機関

② それを必要とする人々の公的機関

③ 政府、地方自治体による社会政策の手段

2 デイ・ケアを主として展開した場所

3 デイ・ケアを主として利用する人々

4 デイ・ケアの主な内容

以上の項目を要約したのが後載の表である。この表から、百二十年のデイ・ケアの歴史は三つの大きな変遷を経て今日に至っていることがわかる。即ち、

1 子ども・家庭の救済の時期

2 子どもの保護、世話の時期

3 子ども・家庭の保護、強化の時期

(1) 子ども・家庭の救済の時期

百二十年のデイ・ケア史の前半分は、死と餓えに直面している

子どもの救済にその中心がおかれていた。一八四〇年代に入つて、医療の発達と共に、市民の衛生、健康管理の知識も次第に普及し、幼児の死亡率も低下の傾向にあった。ところが、勤労婦人の幼児の死亡率は依然として高く、このことが社会問題化し、児童福祉の第一歩はこの乳幼児死亡率の低下をめざしてはじまったのである (Forest, 1927)。当時としては、その数も少なく、特別の入所基準もないまま、十五週の乳児から三歳までの子どもが一室に入れられ、経験のつんだ看護婦の手で管理された。

健康への関心は、規則正しい生活習慣、正しいマナーへの関心とただちに結びつき、良いお行儀に対してはチケットを与えるなどしており、今日の行動修正主義が採用しているトークン・エコノミー (本誌三月号参照) をすでにとり入れていたことが報告されている (全米保育所連盟, 1920)。また年長の女兒には裁縫等も教えていたので、初期の保育所は、ただ子どもを集めて管理していたのではないが、その雰囲気は陰うつなものであったという (Fain & Clark, Stewart, 1973)。健康管理としつけを重視したデイ・ケアは、その後しばらく続くが、一八八〇年代からヨーロッパ各地からの移民が急激に増加し、しかも彼らの多くが都市のスラム街の住人になっていったとき、彼らの生活およびその子どもの問題が新たな社会問題として、脚光をあびるようになってき

た。このような社会問題の解決のために反応したのがセツルメント運動である。セツルメント・ハウスは、スラムのど真中に建設され、あらゆる社会サービスの仲介所の役割を果たしていたが、その中心は、初期にあつては子どもの、後には親の「教育」にあつた (Clemh. 1956)。一八九八年に、最初のセツルメント保育所がシカゴの有名なハル・ハウスに開設されるが、その開設動機は「そこに子どもがいるから」という単純なもの (Adams, 1910) で、その内容も子どもの安全管理が主であつた。一九〇〇年代に入ると、保育所に幼稚園を付設して当時優勢であつた、フレイベル主義の恩物による教育が実施されたが、フレイベル主義幼稚園

デイ・ケアの変遷

がそうであつたように、やがて形式的な教育になつていく。一方、同じ頃、西海岸では、公立学校に保育所を作り、子どもと家族の教育が始められていた。その設立動機は、移民の子弟の就学率をあげ、語学や生活上の知識の伝達をおこなつて、アメリカへの適応をはかることにあつた。彼らの多くは、幼い弟や妹の世話という仕事をもつていたため、就学率をあげる前提として、保育所は必須の条件であつた訳である。またこの項には、貧困の見方が変化し、その根は工業化社会にあるという見方より、親自身の意欲のあり方にあるとする見方が強まってきたため、貧困という社会現象を親の教育によつて解決しようとする傾向もつよくな

	デイ・ケアの目的	デイ・ケアの場所	デイ・ケアの利用者	デイ・ケアの内容
1850年代	① 勤労婦人の幼児の死亡率を低減すること	病院付設の施設 慈善事業団の施設	勤労婦人の子ども	保健指導・しつけ (子ども) 食事の給与・休息・弱い者いじめからの保護
1890年代	① 貧しい移民の救済	セツルメント・ハウス	スラム街の子どもとその親	(親) 法律・医療相談、住宅・職業のあっせん
1910年代	③ 移民家族のアメリカ化	公立学校	移民の子ども 移民家族 (母親)	● 生活の管理、健康管理 ● 家事・育事の知識の教授
1920年代	① 特定の勤労婦人 (未亡人・)	民間保育所	勤労婦人の子ども	● 食事のマナー、保健、基本的社会性

1930年代	病気の夫をもつ）の対策 ①失業対策	ナーズリー・スクール 連邦緊急保育学校	失業家庭の子ども	表現活動、自律活動、あそび ●食事の給与・休息・感情表現のコントロール、あそび ●生活の管理、健康管理、あそび ●身体的世話、非社会的行動と感情表現のコントロール、運動、あそび
1940年代 1950年代	①婦人の労働力確保 ①勤労婦人対策	戦時保育所 民間保育所 親戚・知人による ベビー・シッター	勤労婦人の子ども 勤労婦人の子ども	
1960年代	①勤労婦人対策 ③貧困対策	民間保育所から大学実験保育所まで 母子センター	勤労婦人の子ども 貧困家庭の母子	●伝統的保育内容から教育重心の内容まで ●親の教育参加、子どもの総合的発達、健康管理
1970年代	①勤労婦人対策 ②乳幼児の発達研究・教育法の開発 女性解放運動 企業の人員確保 ③貧困対策（共和党） 全体発達保障（民主党） 都市対策	民間・公立の保育所 大学実験保育所 デイ・ケア・センター 企業内保育所 家族・デイ・ケア デイ・ケア・センター デイ・ケア・センター フッター・スクール	勤労婦人の子ども 子ども ●さまざまな階層の子ども ●すべての子ども ●女性勤務者の子どもも ●働く意欲をもった貧困家庭の母親 ●すべての子ども ●スラム街の子ども とその母親	総合的発達を促す内容

り、デイ・ケアを中心に親の教育も盛んになっていった。

この時期のデイ・ケアは、身体的に、あるいは経済的に劣悪な条件にある人々の、最低の保障をめざす福祉施設を機能すると同時に、その後半には、社会改善のための手段としての役割を果たしたといえる。

(2) 子どもの保護・世話の時期

デイ・ケアが次第に普及してくると、これを簡単に使う親も増加し、親の養育の責任感の喪失を心配する者が増えてきた。また、これに呼応するように、一九二〇年代にナースリー・スクール運動と共に、幼児の研究がすすんでくると、幼児の発達における親の役割の重要性が明らかにされ、子どもを本当に救済するのは施設ではなく、親であるとする意見が優勢になってきた。そこで、この時期に、はじめてデイ・ケア入所基準が設置され、「未亡人と病気の夫をもつ婦人の子弟」のみがデイ・ケアの利用が許されるようになるのである。二〇年代のナースリー・スクールの興隆は、「母親よ家庭に帰れ」の思潮を作る一方で、ナースリー・スクールのデイ・ケアの役割を増大させ、両者は内容的に極めて接近したものになっていくのである。ナースリー・スクール運動

のバック・ボーンは、デューイを中心とする進歩主義思想であったため、その内容は、子どもの自発活動、表現活動、身体活動を重視していた。従って、デイ・ケアもまたこれらを順守することとなり、前時代のデイ・ケアとは異なり、子どもの心理的な要求をとり入れた保育内容が、この時からスタートする訳である。福祉と保育が歩みよりをみせた矢先に、経済大恐慌が発生し、再び福祉優先のデイ・ケアに逆戻りしてしまうのである。「連邦緊急保育法案」は、一九四一年までつづくが、その法案と入れ変えに、今度は第二次大戦突入で「戦時保育所」がはじまり、一九三〇年、四〇年代のデイ・ケアは、親の代理として子どもの世話と保護をその中心的課題としていたといえる。

大戦後、男性が戦場から戻ってくると、彼等の職場復帰のために、勤労婦人は再び「母親よ家庭に帰れ」のキャンペーンにのって、家庭婦人に戻っていった。もちろん、勤労を続けなければならぬ、またそれを希望する女性は沢山いたが、家庭婦人の増大していく状況にあつては、勤労婦人の対策は必ずしも充実したとはいえない。勤労婦人は、その子どもを近隣の民間の保育所にあずけたり、親戚や近所の人にベビーシッターをたのんだり、あるいは子どもを家に残して仕事に出かけていったのである (Coldwell, 1971)。保育所に預けられた子どもたちは、すでに保育所の

主流になっていた、福祉と保育を統合した経験をもつことができたが、大多数の子どもは、安全だけが配慮される単なる管理下におかれていたのであった。

全体としてこの時期をながめると、内容改善にやや前進がみられるものの、デイ・ケアは、勤労婦人の対応策として、不完備ながら機能していたといえることができる。

(3) 子ども・家庭の保護、強化の時期

デイ・ケアの量、質両面にわたって一大飛躍するのがこの時期である。そして、今日では、「幼児教育の中で最も重視され、最も高価で、最も人々の話題になっているのがデイ・ケア」(Hynes, 1975) という状況である。その結果、あまりにも沢山の人が、各自のデイ・ケアの必要から、さまざまなセンターを発展させているため、デイ・ケアの正体をつかむのが困難なほどである。一体、どうしてこんなに急速に、デイ・ケアの思想が普及したのであろうか。その背景について簡単にみてみよう。

母子センターの発生

一九六六年、ヘッド・スタートの効果を充分にあげるために、

ハント (Hunt, 1967) を会長とする特別委員会が、ヘッド・スタートを上と下とへ拡大する勧告をおこなったことはすでにみた(本誌二月号参照)。フォーロー・スルーは、ヘッド・スタートを「そのまま上へ」拡大したプロジェクトであったのに対して、母子センターは「そのまま下へ」おろしたプロジェクトである。一九六七年の秋、三十六の地区が選ばれて、母子センターのパイロット・プログラムがすべり出した。この計画は、引きつづき二年間継続することが保障され(七〇年の夏まで)、プログラムの開始と同時に、その成果を評価する研究も平行してすすめられた。

このプログラムの対象は、ヘッド・スタート同様、一定の所得水準以下の家庭の母親と三歳以下の乳幼児である。そして、その内容も、ヘッド・スタート同様、子どもとその両親に対して、健康、教育、社会的サービスを提供するもので、その運営に当たっては、母親が半数を占める計画委員会が主要な役割を果たした。また、この計画委員会には、コミュニティの教育、保健のサービス機関を活用する意図から、コミュニティの代表者が、またその内容の指導から、その地区の大学関係者も参加して情報が提供された。

(つづく)